

2021年度共通テスト リスニングの配点を東大も公表

河合塾

2020/2/13

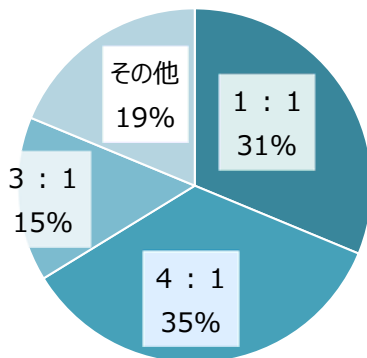
大学入学共通テスト（以下、共通テスト）のスタートまで1年を切った。英語のリーディングとリスニングの配点がセンター試験時から変更されるため、各大学の配点比率の公表が待たれるところだ。このほど東京大が共通テストから英語選択者にはリスニングを課すことと、その配点を発表した。

■各大学のR：Lの配点比率は多様に

共通テスト「英語」では、センター試験時の「筆記」は「リーディング」に改称され、配点も変更される。「リーディング（R）」と「リスニング（L）」の配点は各100点、つまり1：1となった。センター試験の筆記：リスニングの配点比は4：1（200点：50点）だったため、センター試験時と比べてリスニングの比重が高くなる。なお、試験時間はリーディングが80分、リスニングの解答時間が30分で、センター試験時と変わらない。

リーディングとリスニングの配点は各大学が自由に決めることができる。センター試験時には素点のR：L＝4：1で利用する大学が大半であったが、共通テストでは配点比率は多岐に分かれることになりそうだ。

<グラフ1> 国公立大一般選抜の共通テスト「英語」
リーディング：リスニング 配点比率の状況



※2月13日現在、河合塾調べ
国公立大173大学中66大学の状況、学部・学科により異なる比率で利用する大学はそれぞれ1大学としてカウント

<グラフ1>は国公立大173大学のうち、一般選抜でのR：Lの配点比率が判明した66大学の状況をまとめたものである。

R：L＝1：1と4：1の大学に大きく分かれた。1：1で利用する大学は、北海道大、お茶の水女子大、広島大など、4：1は筑波大、千葉大、神戸大、岡山大などとなっている。

3：1は利用する大学の数では3番手となるものの、東北大、名古屋大、京都大、大阪大など旧帝大が顔を揃える。

「その他」の大学では、2：1、3：2、5：1、7：3など様々な比率がみられる。

■東京大では共通テストからリスニングも利用、R：Lの配点比率は7：3

東京大では一般選抜個別試験（2次試験）の英語で「聞き取り試験」を実施しており、これまでセンター試験「英語」選択者のリスニング成績は利用していなかった。このほど東京大が発表した「2021年度入学者選抜に関する予告について」の中で、共通テストの「英語」はリスニングも利用することが明らかになった。配点はリーディング140点、リスニング60点と、リーディングにやや重きを置いた形となる。なお、2次試験の「聞き取り試験」は引き続き実施される。

各大学がどのような配点比率にしているのか、公表状況は河合塾の大学入試情報サイトKei-Netに掲載している。こちら合わせてご覧いただきたい。

Kei-Net「2021年度入試 国公立大 共通テスト英語 リーディング・リスニング配点比一覧」
https://www.keinet.ne.jp/dnj/21_index.html

■高校の先生の半数「R:Lの配点比率はセンター試験のままが望ましい」

河合塾では、昨年の10月下旬から12月中旬にかけて、進路指導に携わる高等学校の先生を対象に、共通テスト「英語」のリスニングとリーディングの配点比率に関するアンケート調査（文末※参照）を行った。

＜グラフ2＞はリーディングとリスニングの配点比率について、どれくらいが望ましいか4つの選択肢から回答してもらった結果である。

- ① R:L=1:1（共通テストの素点通り）
- ② R:L=4:1（センター試験と同様）
- ③ R:L=3:1（試験時間の比率に近い配分）
- ④ その他の比率が望ましい

回答は②4:1が約半数を占めた。その理由として「リスニング指導に費やす時間から考えて、4:1以上にリスニング比重を増やす必要はない」「学術的基礎力という観点からすると、読めて書けるということの方が、重要度が高いのではないか」「リスニング能力を軽視しているわけではないが、リーディング力はやはり重視して欲しい」など、新しい配点比率（1:1）がリーディング軽視につながることを危惧する声が多かった、また、「リスニング重視は英会話教室に通える人が有利になり、経済格差が大きくなりそう」など、不公平感の増大を不安視する声もあった。

一方、共通テストの素点である①1:1がよいとする回答は15%にとどまった。1:1を支持する意見では、「英語4技能はそれぞれ均等であるはずなので、1:1でよい」「生徒のリスニング能力をより伸ばせる」といったものがあつた。

③3:1がよいとする回答は3割にのぼった。「リスニングの配点を高く設定するのは賛成だが、R:L=4:1→1:1の変化は大きすぎる」「少なくともR:L=1:1はリスニング偏重だと思う。大学入試を利用して高校の授業改善を行おうとするのであれば、英文読解を軽くする理由が示されていないのではないか」「時間の比率に合わせた方がよい」など、急激な変化に対する不安の声やリスニング重視に反対はしないが試験時間と配点との比率の差に納得がいかないとする意見が聞かれた。そのうえで、「授業の中で、RとLの対策を1:1の時間をかけて行うのは考え難い。3:1が適当だと思われる」など、1:1と4:1の中庸として3:1を選択するとした回答が多かった。

なお、各大学からの早期の公表の望む声は、支持する比率に関係なく寄せられた。現時点で判明しているのは全国公立大の4割弱であり、半数以上が未公表となっている。英語の授業に大きな影響を与える事項でもあり、残り6割の大学の早期の公表が望まれるところである。

※アンケート概要

実施期間：2019年10月下旬～12月中旬（河合塾「大学入試分析報告会」の全国62会場にて実施）
対象：高等学校教員 回答者数：2,103名（文中のグラフはこのうち未回答者を除いて集計）

＜グラフ2＞共通テスト「英語」
リスニング（R）とリーディング（L）
配点比率はどれくらいが望ましいか

